研究１

通常の学級の児童が障害について学び理解を深めるための教材と学習プログラムの開発(1)
－障害体験授業の構成－

Ⅰ．はじめに

筆者らは、小学校の通常の学級において、１年生から６年生まで６年間を通して展開する障害理解授業「やさしさってなんだろうな？」を試行中である。その中核となるのが、３年生から６年生までの「総合的な学習の時間」を利用した授業である。１学年につき１つの障害を疑似体験し、調べ学習を行い、障害のある人と対話をし、自らの考えを発表するという内容で、４年間で３つの障害と高齢者について学ぶものである。本研究では、これまでの実践を踏まえ、「総合的な学習の時間」で障害理解を扱う際の授業構成について検討する。

Ⅱ．方　法

１．授業のねらい

本授業のねらいは以下の２点であった。

①自分の周りには色々な立場や状況の人がいることを知り、自他の違いを正しく捉える。
（障害や高齢者の疑似体験、その人たちとの対話を通して不便な状態を知る。困っている人を目の前にして自分は何ができるか、どうしたいかを考える）

②相手を認め、やさしさについて考える。
（相手の立場や状況を判断し、その気持ちや行動を考える。世の中は「助けられたり助けたり」という関係で成り立っていることを知る）

２．授業の構成

(1) ３年生から６年生まで４年間の構成（障害体験の配列）

○視覚障害は､疑似体験が比較的容易に実施でき､障害への対応を考えやすいことから、初めての体験学習となる３年生に配当した。

○続いて、同じ感覚障害である難聴体験を４年生に配当した。

○車いすや高齢者体験は、ある程度の体力が必要で、安全面への配慮も必須であることから、高学年に配当した。

○特に、高齢者体験は各種の障害が複合するものであり、６年生に配当することによって、４年間の学習のまとめが行えるように計画した。

⑵ 障害体験授業の構成

すべての体験学習において以下の５つの内容で構成した

①障害に関する基礎知識を学ぶ

②十分に時間をかけて障害の疑似体験を行う

③体験を通して、障害のある人の暮らしや支援についての課題を設定し、調べ学習を行う。

④障害のある人や障害と関わりのある人に来校してもらい話を聞く

⑤体験内容や体験を通して自分が何を考えたか発表する（個人またはグループ）

（特に６年生では、どういう社会にしていきたいか、自分の考える「やさしさ」とはなにかを追求する）

⑶ 授業者の協働

授業に際して、通常の学級担任は、学級の特性や個々の児童の興味関心に応じた指導を行った。通級指導教室担当者と特殊教育研究者は、導入時の障害に関する基礎事項の学習、疑似体験の体験内容について発案と実施、記録等を行った。

また、小グループで学習を行うため、安全確保、体験補助、体験中の相談や支援などを、校長・教頭、専科教諭も担当した。更に、保護者には安全確保ために参加を依頼した。このことにより障害の理解学習が学校全体の学習としてより多くの人に身近なものとして認知された。

Ⅲ．授業の結果

１．車いす利用体験授業

⑴授業計画

実施した授業の例として、５年生の車いす体験の授業の流れを表１に示した。本授業は全体を 16 時間とし以下のように計画した。

・導入（車いすに関する基礎知識）（２時間）

・車いす利用体験とまとめ（６時間）

・課題発見と調べ学習（車いすの工夫、バリアフリーについてなど）（５時間）

・車いす利用者との出会い（自分たちの学習内容を利用者に伝え、話をうかがう）（２時間）

・まとめ（1 時間）

表１　　車いす体験指導の流れ

時数	内　容		学習の流れ	用意・依頼	場所
1	導入	昨年度の振り返り　車いす体験の実施について知らせる	昨年度をふりかえる。 やさしさについて考えてみよう。学習の流れを知る。 車いすについて知る。	今年の学習のながれ ppt車いすについて	PC室
2	知識	車いすを知ろう	車いすの扱い方に関する注意事項を確認する。 車いすに触れ、観察し、疑問点をだす。	取り扱い ppt 車いす 6 台 ワークシート 1	PC室
3 4	体験1	車いすにのってみよう（体育館コース）	安全な場所で実際に車いすにのり、動かしてみる。 様子をデジカメで撮影する。ワークシートに体験をまとめる。	車いす　6 台 ワークシート 2 安全管理者	体育館
5 6	体験2	車いすにのってみよう（外コース）	決められたコースを試乗する（全員）。 ・校庭裏庭長距離コース ・教室座席コース	車いす　6 台 安全管理者（保護者） ワークシート 3	校内
7 8	追体験	町にでよう	今までの体験に基づいて　学校の周りが車いすにとってどのような環境であるかを調べる。 デジカメを利用する。車いすを利用している人に対する質問を考える。	デジカメ。 安全管理者 ワークシート 4	校外 PC室
9	課題発見	課題をみつけよう	車いすに乗る人の立場になって、生活を考えよう。（自分で生活場面を設定する。） どのような場面に対してどういう工夫ができるか　調べ学習の見通しをたてる	ワークシート5 インターネット	PC室
10		中間発表	自分たちの課題と課題設定の理由、調べ方についての説明をする		
11 12 13	調べ学習	課題への取り組み。多様な方法でしらべながら発表方法を考える	体験をまとめる。車いすでの課題についてしらべる。まとめる。 方法・・・パソコン、壁新聞などの選択 必要な場所等発表に使う素材をデジカメ等を利用し集める。HP 等から発表の素材も収集し新聞作りを行う。	WEB 図の提示 デジカメ、パソコン、等、必要なもの	所定の場所
14	発表と確認	発　表	体験や調べ学習の要点（体験してわかったこと・感じたこと・疑問・調べてわかったことなど）を発表する。	プレゼンテーション関係一式	PC室等
15		車いすで生活している方と話し合い	車いすで生活している方をゲストとし、疑問を尋ねる。生活の様子についての話を聞く	車いすで生活をしている方に来校いただく	
16	まとめ	作文・まとめ	全体を振り返って　わかったことや、やさしさについてを考え作文を書く。	作文用紙	学級

写真１　導入授業（車いすの基礎知識）

写真２　車いす利用体験
昇降口の開けにくいドア（左上）、前輪がはまってしまう（右上）
階段はおんぶして昇る（下）

写真３　車いす利用者に学習内容を発表

写真４　リフト付き自動車を知る

⑵ 授業の結果

ワークシートへの児童の記述から、授業結果として児童の変容を整理する。

①導入授業時の記述

車いすの構造や役割に関する記述が大半であった。

例）・タイヤの横についているのを回すとタイヤが動く

・けがなどをしている人が乗る

利用者の不自由さへの言及は少数

例）・一人でのるのは、けっこう大変

②疑似体験後の調べ学習の課題

疑似体験によって車いすの特性や不自由さへの気づき、解決策を模索していた。

例）・段差を一人で簡単にのぼれるような車いすがあるといい

・完全防水でタイヤが空回りしないような車いすがほしい

また、利用者をとりまく環境や利用者の日常生活への関心もひろがった。

例）・スーパーに車いす用のトイレは何個あるか

・買い物をするときどんな工夫をしているのだろうか

③車いす利用者への質問

車いす利用者への質問として以下のようなものがあった。

・日常生活動作や趣味に関する質問

着替え、入浴、スポーツ、旅行など

・利用者の立場に立とうとする質問

車いすに欠点があるとしたら何だと思いますか？

手伝いを頼んだとき無視されることがありますか？

④まとめに記述された内容

本授業全体のまとめとして以下のような記述があった。

・車いすの不自由さに対して道具による解決を考える

例）・もっと便利な車いす（小回り、軽い、長時間、安い）を作りたい

・いろいろなところにスロープをつけたほうがいい

・行動による解決を考える

例）段差で困っているときは声をかけてあげて、必要ならはこんであげる

・車いす利用者への想い

例）・〇〇さんは車いすにのっているのに、みんなと同じように明るく生活していて元気だと思った

・階段をどう上るかではなくて、どうやって階段をなくそうかという考え方も不便さを解消できるかもしれない

以上のように、授業開始当初、児童たちは車いすについてほとんど知識を持っておらず、利用者に対する関心も希薄であった。疑似体験によって車いすの特性や不自由さを知り、調べ学習で解決法を考えた。

車いす利用者と出会い、想像しなかった不自由さや、周囲他者の不適切な対応に気づく一方、利用者が自分たちと同じように主体的に生きていることを知った。

このように疑似体験と調べ学習を積み重ねた上で、車いす利用者と出会ったことによって、児童たちは車いすやその利用者に対する認識を深めると同時に、利用者に対し自分は何をすべきかを具体的に考えることが可能になったと考えられる。

⑶授業に参加した保護者の感想から

車いす利用体験では、安全確保と記録のために保護者に参加を呼びかけた。以下はそうした保護者の感想である。

百聞は一見にしかず、百見は一体験にしかず、と言う通り、この年にして始めて、車いす体験をさせていただきました。ホントにホントに小さな段も困難な壁で、時間がかかる事がわかりました。車いすだけでなく、松葉杖やベビーカーの人達も大変である事に子ども達は気づいたかな？今回はＡさんが車いすの時はＢさんが介護、Ｃさんはカメラという様に役割分担になっていたようですが、自分が介護役でない時は手を出さない子が多かったようでした。気がねや遠慮、出しゃばりたくないなどの感情は、大人も同様にありますが、これを上手く乗り越える指導法を期待したいです。週休二日制による子どもの学力低下とか、犯罪の低年齢化を言われたりしますが、私達が、小学生の頃はこんな種類の体験学習はありませんでした。こんな貴重な授業が、子ども達の心の片隅にしっかり残るであろう事は素晴らしいことだと思います。

２．授業構成について

他の学年の授業を含めて、障害理解授業の構成について検討を試みる。

児童たちは、前述した【障害体験授業の流れ】①の「障害に関する基礎知識」と②の「疑似体験」によって、障害のある人に対して「なにもできないのではないか」とか「かわいそうだ」と考え、障害に起因する困難さを大きく感じていた。

【感想例】「目がみえない人はジュースやコップに入れるときや、花に水をいれるとき
とってもふべんで、すごくかわいそうだな、と思いました」
「誰かいないと外にはでられない」
「年をとりたくない」

しかし、②の「疑似体験」を繰り返し行い、③の「調べ学習」を深めるうちに、障害のある感覚に代行する感覚の存在や、感覚や運動を補助する介助器具の存在や、その有用性に気づき始めた。

【発言例】「白じょうを使ってやったら、コースからはみ出ないで上手にできました」
「手話を覚えたい」
「足で走るよりも速い車いすがある」

さらに、④の「障害のある人の話を聞くこと」によって、子どもたちは、障害があっても生活のすべてが困難になるわけではなく、それぞれの生活を楽しんでいることも知った。

印象的な場面は多数あるが、中でも、視覚に障害のある人の「海外旅行に行くのが好き。もう３０カ国行きました」ということばや、車いすを利用している人の「車いすサッカーで優勝したい」ということばに、子どもたちが目を輝かせ、思わず喚声を上げる場面もあった。筆者らも通常の学級の担任も、子どもらと共に学び、障害のある人に実際に会って話を聞くことの大切さを再認識した。

⑤の「発表」では、「困っていることは何でもやってあげる」「専用の歩道や車両などをつくる」といった、障害がある人を分離する意見感想も多く見られた。しかし、この学習を繰り返し経験した６年生の発表には、下記の例のように、「その人が本当に困っていることをしっかりと見て行動する」「私だったらどうしてもらいたいか考える」などの考えも見られるようになった。

６年生の私が考えるやさしさ

私が考えるやさしさは、手足が不自由になったからといってベットにずっと寝かしていて、全てをやってあげる・・・。と言うのは、やさしさでは、ないし目の見えない人、耳の聞こえない人、車いすの人だからと言ってただ、声をかけたり、押せないボタンをおしてあげる・・。とかその人が求めて無いことをやってあげてもやさしさではないと思います。もし体の不自由な人が、助けを求めていたりしたら助けてあげる。その人を「助けよう」と思えることもやさしさだと思います。

Ⅴ．おわりに

本授業を継続的に実施することで、以下のことが明らかになってきた。

○障害の疑似体験は、障害に起因する不自由さや困難さを理解し、学習内容を焦点化する上で重要である。

○疑似体験には、十分に時間をかけることが大切である。子どもたちが、障害のある感覚や運動機能を代行する感覚や運動機能の存在、また点字、白杖や介助機器など、さまざまな工夫や支援があることに気づくまで行う必要がある。

○そのことによって、障害のある人に対して「何もできず、かわいそうな存在」また、「何かをしてあげる対象」として認識することの誤りに気づくことができる。

○疑似体験に加えて、障害のある人に実際に会い、疑似体験から得た疑問や調べ学習での疑問をぶつけ、話を聞くことにより、子どもたちが持つ、障害に関する認識が更に変容していく。